

もつと知りたい

武者小路実篤

実篤と家族 1

武者小路実篤はお父さんが早く亡くなったので、家族はお母さん、お姉さん、お兄さんでした。四人で助け合い、思いやって暮らし、おたがいをとても信じあっていました。

家族が信じてくれたから、実篤はのびのびと自分の道を歩くことができたのです。

母・秋子
父・実世

実篤は小さいころ、親とい
うのはお母さんだけだと思
っていたそうです。

お父さんが亡くなったとき、実篤はまだ
小さかったので、何もおぼえていませんでした。
おばあさんから聞いたお父さんの言葉は、
実篤にとつてはげましになりました。



父は彼の兄を見て、「この子はわるくいつても大使にはなれる」と云ったそうだ。そして彼を見て、「この子をよく育ててくれる人があったらな！」と云った。「そうしたら、この子は世界に一人と云う人間になるのだが」この言葉は三歳の彼を見て死んでゆく彼の父が云った言葉であつたが、彼の一生には大きな力を持っている言葉である。

〔或る男〕第四章

父は死ぬ時母に「お前は殺されることを恐れては家がたもてない」と云うようなことを云った。(中略)

母の犠牲で僕の家はたもて、僕は病身であつたが無事に育つた。母の教育はきびしかった。(中略)

僕が世間で悪口云われた時も、母をよわらせるのが僕の一番苦痛だった。だが母は僕を信じていてくれた。

〔母に感謝していることなど〕



左から、1歳ころの実篤、姉・伊嘉子、兄・公共

実篤は22歳の時に、大学をやめて文学者になろうと決心します。でも、きつと反対されるだろうと思うと、なかなか言い出せません。そこで、旅行に出かけたときに、お兄さんに手紙を書きました。すると、次の日、電報が来て、見ると「ヨロシ フンレイセ ヨ アニキ」と書いてあります。フンレイセとは「頑張

りなさい」という意味です。お兄さんは、弟の実篤を信じて、自分の道を進む事を許してくれたばかりか、はげましてくれたのです。



(ある時海で)不意に波が来て彼をさらった。母はそれを見てふと彼が泳げるようになったと思った瞬間に、彼の姉は「あっちゃんが流される」とあわてて云った。そして(中略)十一、二の姉は彼にいつき彼を抱きおこした。彼はその時から姉を生命の恩人のように思った。

〔或る男〕第十八章

もう公共を子接せやせよとになった。昨日兄に手紙を出した。今電報が来た。たいかと思ふ。ヨロシフンレイセヨ、アニキ。先づ内報を出す。昨日イブセのソルリー。お兄さんからの電報がとどいたことを親友の志賀直哉へ知らせる手紙。明治41年8月13日

お兄さんから電報がとどいたことを親友の志賀直哉へ知らせる手紙。明治41年8月13日

あなたはあ？

ずっと大切にしたい家族の思い出の品はありますか？それはどんなものですか？

今はまだない、という人も、きつとこれから見つかりますよ。



姉・伊嘉子が作った押絵人形

お姉さんは、実篤が14歳の時に病気で亡くなりました。この押絵人形はそのお姉さんの思い出の品で、実篤は大人になってから何度も引越しましたが、90歳で亡くなるまでずっと大切に持っていました。